『Catedral』寸評

・主題を反行させたり、バス声部とカノンを繰り広げたり、
長大な下降線を前半と後半に置いたりと、様々な工夫がみられる

・旋律の最高音をm.14に持ってくることで曲全体の流れに
構成感を与える

・m16にホ短調のドミナント−トニックのカデンツ、
m.8のドミナントに半終止が感じられる

・全体は自由なインヴェンションというおもむき

・Catedral（英語だとCathedral）だけではややタイトルの意図が不分明
どのようなCatedralなのか形容してある方が伝わりやすい

完成度をさらに上げるために

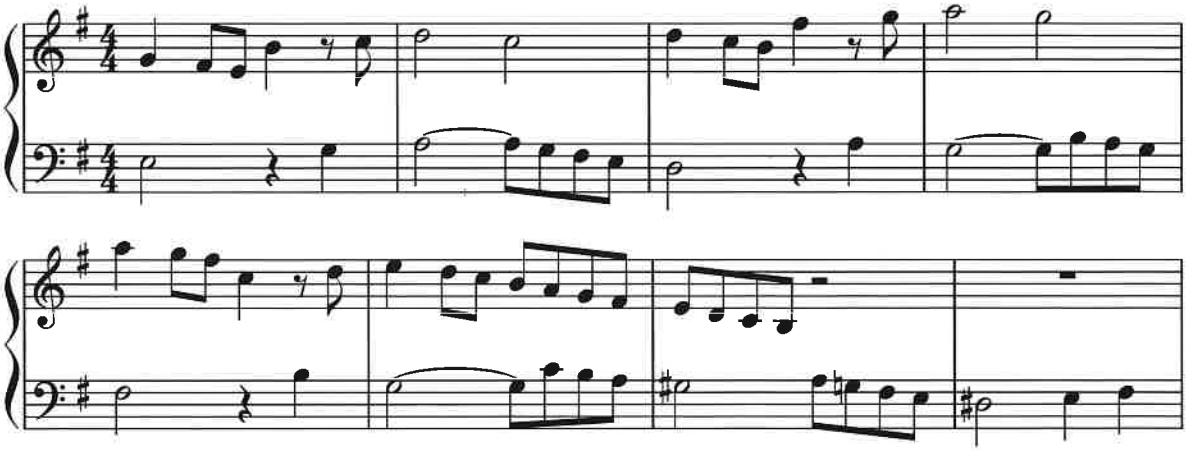
・旋律的な興味を各声部で優先させる対位法でも
主題の和声分析は調性感を保つためにも必須の作業

・バス声部は和音とその転回形のどれかにほとんど当てはまり
和声外音はだいたい経過音

・バス声部と上声部が和声的に納得のいくカデンツを形成しているか
限定進行音や和声外音はきちんと処理されているか
そのような吟味も和声音楽と同様に必要

・結論としてまず旋律部と整合するバスの和声付けを4小節ずつくらい
構成し、バス声部を主題の模倣や合いの手になるように転回形や
和声外音の利用で潤色を加えていく方が対位法の研究には近道

m.1-8の参考例



m.＝measure 小節番号のことです。

ぜひ研究をつづけよう!

持麿 勉